



鹿屋市では時間雨量109.5mmと過去最多。1週間で1年の半分にあたる1,059mmの雨が降りました。腰の高さまで水位が上がり、床上浸水など甚大な被害となりました。(画像提供) 大隅肝属地区消防組合

1時間雨量 / 雨の降り方と人が受けるイメージ

10～20mmの雨
やや強い雨

「やや強い雨」と表現され、ザーザー降り。屋内で話し声が聞き取りづらい。地面一面に水たまりができる。跳ね返りで足元が濡れる。

20～30mmの雨
強い雨

「強い雨」と表現され、どしゃ降り。傘をさしても濡れる。寝ている人の半数が雨に気付く。側溝があふれ、小さながけ崩れが始まる。

30～50mmの雨
激しい雨

「激しい雨」と表現され、バケツをひっくり返したような雨とも言われる。道路が川のようになり、がけ崩れが起きやすく避難が必要。

50～80mmの雨
非常に激しい雨

「非常に激しい雨」と表現され、滝のように降る。傘がまったく役に立たない。視界が悪く車の運転は危険。多くの災害が発生する。

今回の雨量
80mm以上の雨
猛烈な雨

「猛烈な雨」と表現され、息苦しくなるような圧迫感がある。雨に恐怖を感じ、大規模災害が同時多発的に発生する恐れがあり危険。

Interview

城ヶ崎の国道沿いで発生した土砂崩れ。災害発生時の状況、現在の心境などを被害に遭われたご家族に伺いました。(2020.8.1 現在)

「土砂崩れに巻き込まれた…」
夫から届いた必死の声——。

いつものように仕事へ出た夫から電話がかかってきました。そしてつぎの瞬間、私は耳を疑いました。「土砂崩れに巻き込まれた…」。

電話は途切れ、すぐにかかけ直しましたが繋がることはありませんでした。まさか…と不安がよぎり、役場に電話をして、初めて城ヶ崎の国道で発生した土砂崩れに巻き込まれたことを知りました。夫はいつも6時過ぎに家を出ますが、この日は滝のように降る雨が弱まるのを待っていたので、出るのが遅れたんです。

「あと少しだけ早く出ていたら、どこかに寄ってくれ



ヘリコプターによるホイスト救助での救出でした。現場の風速や気圧、吊り上げられる場所まで移動できたことなど、さまざまな要因が重なって救助できた。運転席だけ土砂に埋まっていなかったことも、「まさに奇跡」と言えるでしょう。

特別救助隊 原添 隊長

ていたら——」。今でもそんなことを考えてしまいます。

その後、夫は海上保安庁のヘリで救助され、鹿児島市の病院に搬送されました。私は、すぐに病院へ向かうため車を走らせたのですが、途中の道路は土砂崩れで寸断され、迂回路を探しながら向かうしかない状況。普段は港まで40分の道のりが2時間も——。不安と恐怖に押しつぶされそうでした。

夫に会えたのは、病院で処置を終えた数分だけです。新型コロナの影響でいまも面会はず、荷物は看護師さん経由。電話でのやりとりが続いています。

いつも、当たり前のように通っている使い慣れた道。数年前も崩れているので「まさか」と思うことはあっても、実際に巻き込まれるなんて想像もしていませんでした。今はただ、夫が退院して平穏な日常が戻ることを願っています。

降り続く豪雨——。自然を相手に前例は通用しない。その命を守るために、

まさかを想定する

大根占城ヶ崎の国道で土砂崩れが発生。車が巻き込まれ崖下の海へ——。災害発生時の3時間雨量は100mmを超え、まさに「豪雨」でした。この絶望的な状況で救出にあたった3名の特別救助隊。災害救助の現場で活動する中央消防署特別救助隊の原添隊長に伺いました。



大隅肝属地区消防組合 中央消防署

特別救助隊▶中水流 徹 副分隊長 (左) / 柳井谷 昌志 隊員 (右)

「前を走っていた車が土砂崩れに巻き込まれたかもしれない」。土砂崩れを目撃した後続ドライバーから入った通報でした。「私たちが現場に到着したのが8時34分。その時点では要救助者の存在は確認できていなかった」と振り返るのは、中央消防署で特別救助隊の指揮をとる原添隊長。木が生い茂り、道路からでは車の存在が確認できない現場。船を要請し海から決死の捜索が続いていました。原添隊長の元に一本の無線が入ったのは到着してわずか3分後のこと。「車が落ちて埋もれている」。

海からの捜索で土砂に埋もれた車の一部が見えたのです。災害が発生してすでに2時間近く経過。一刻を争う状況でした。高さ15mの崖を降りて救助に向かったのは、特別救助隊の中水流副分隊長と柳井谷隊員。「状況から見ると危険な状態。とにかく生存を祈って進んだ」と話す2人。現場に到着するとすぐに意識を確認し、車から救出。男性は海上保安庁のヘリで病院へ緊急搬送されました。「運転席以外は土砂に埋まっていた。もし発見が、救助が遅れていたら低体温症で命の危険も…」と振り返り、緊迫した状況を語りました。

1週間で年平均降雨量の約半分が降った鹿屋市では、90棟以上が浸水。救助にあたった原添隊長は、経験則に頼った判断が、避難の遅れにつながってはならないと強く訴えます。「被害に遭った多くの方が『まさか氾濫するとは。経験したことがない』と口をそろえ、想定外だったと答えます。しかし、自然を前にこれまでの前例は通用しません。想定外の事態を想定すること。雨や台風による災害は、事前の情報で逃げることはできません。結果が空振りにならないように、その命を守るために、避難を続けてください」。



- ①
- ②
- ③
- ④

①道路の斜面が幅約20m崩壊し、走行中の車を押し流した②海上保安庁の巡視艇うけゆりによる海上からの捜索③ヘリから降下して救助にあたる海上保安庁の隊員④二次災害に備え斜面を警戒する隊員



大隅肝属地区消防組合 中央消防署 特別救助隊 原添 耕太郎 隊長

※ホイスト救助…着陸できない現場で空中停止し、ホイスト（ウインチの一種）と呼ばれる先端にフックのついたワイヤーで救助員を降下させ救助します。